

埋兒孝感説話の朝鮮的演變に關する論考

——比較軸としての郭巨話を中心に——

成 澤 勝

一 高麗・朝鮮における郭巨埋兒の處理

朝鮮の文獻の中で初めて郭巨の記事の現われるのは、『三國遺事』の「孫順埋兒」において、「前孝」の事例として擧げられている部分である。しかし、全體の敘事内容としては高麗時代末の權溥・權準・李齊賢らの『孝行錄』に收められた「郭巨埋子」が最初のものである。『孝行錄』は異本が多いが、ここでは高麗大學圖書館所藏のものによって論を進める。この『孝行錄』の成立の経緯についてはその序文からわかる。即ち、

權準が畫工たちに二十四孝圖を描かしめ、父の權溥に獻じた。權溥はそれを増修し、六十二篇となした。その辭語の洗練されていないのは、田野の凡民たちが皆讀め

るようにするためであった。權溥が八十五歳、權準が十六歳であった。⁽²⁾

權溥が八十五歳というのは一三四六年のときであり、『三國遺事』よりはかなり後のことであつて、一然が「前孝」と稱した郭巨埋兒とは敘事傳承の系統を別にしてゐる。

また、やはり郭巨話を收録する『三綱行實』孝子圖は、風俗教化を目的に王命による國家的政策として編纂事業が展開されたという記事が『世宗實錄』をはじめ當代の多くの文獻に散見する。世宗代に一旦編纂が完了し、印行され、そして繼續的に後代になつても諺解・頒布事業は繰り廣げられてゐた。朝鮮時代にあつては、孝倫理の教宣が國家最大の事業のひとつであつたことから、そのための教化の書の刊行が官・民・寺の三方面から活發になされてゐた。例えばその代

表的なものとして、孝の内容を詳しく説く『父母恩重經』類があったし、そしてまた孝行事例を示した三綱行實類⁽³⁾があった。

この『三綱行實』の序の

孝子の部分は、太宗文皇帝が下賜された『孝順事實』の詩を謹んで採録し、併せて、臣の高祖である溥が撰した『孝行録』のなかの、名儒李齊賢の贊を載せ……⁽⁴⁾という記事からもわかるように、高麗の『孝行録』との関連についても明らかである。事實、高麗大學本で見るとかぎり兩者の郭巨の條の字句は完全に一致している。⁽⁵⁾その内容は、

郭巨は家の貧しいうちに、老母を奉養していた。三歳になる幼児が居り、老母はいつも自食を減じて幼児に分け與えた。郭巨がその妻に言うには、「貧乏で養うことができない。しかも、子が母の食まで奪うので、一緒にこの子を埋めてしまおう。」と。妻はこの言葉に従うことにした。そこで、地を三尺掘ったところ、黄金一釜が現われた。その上には書狀があつて、「天が孝子郭巨に下賜したもので、官も奪うべからず、人も取るべからず。」と書いてあつた。

さらにこの本文に續いて、李齊賢の贊も添えられている。即

埋兒孝感説話の朝鮮的演變に關する論考（成澤）

ち、

郭巨は家が貧しく、親を養うべく竭力していた。母親が幼孫を憐れみいつも自分の食するものを分け與えるので、〈中略〉郭巨と妻は子を埋めてしまおうとした。⁽⁶⁾

特にここで、高麗時代の人である李齊賢の「幼孫を憐れみ（母憐幼孫）」、および「埋めてしまおうとした（將埋之）」という解釋は注目しておく必要がある。

二 中國の埋兒譚

この郭巨話は本來中國のものであり、孝子譚の中でも代表的な存在であると言えよう。時代あるいは文獻によって様々な描かれ方がなされているが、いずれも所謂「志人」體的手法による點で共通する。

周知のように、中國の敘事の歴史は、史書や集成書としての體裁を整える以前から、あるいは口碑傳承として、あるいは民間の記録として存在していたものが多く、そしてまた文章化・集成化される場合には、歴史を敘述する形で整理されていた。初めて『史記』に現われるような本紀・世家・列傳も、その内容は敘事體（*narrative*）であつた。特に列傳は人物譚という性格を持ち、後の小説の敘述形式として類型化され

ていく。『莊子』「逍遙遊」に發する「志怪」なる術語に由つて設けられた志怪小説という範疇に對しての、所謂「志人小説」はまさしくこの傳統形式によつた人物譚の體裁なのである。こうした見方は一般に認められていてと考えていいようである。⁽⁷⁾

孝子譚に焦點を絞つてみるならば、漢代には劉向の『孝子傳』（全容は不傳）が現われ、倫理教宣の役割を擔つたけれども、魏晉六朝時代になると志怪の干寶『搜神記』、あるいは志人の『世說新語』などが出た。いずれも「志（しるす）」といった著述意圖によるもので、藝術とか娛樂といった文學的嗜好の對象としては限界があつたにしても、孝行爲を主要モチーフとする敘事として、當然のことながら文學研究の對象となすべきものである。これ以後も、特に郭巨の記事の見える文獻として、唐代には教化を目的とした『蒙求』が出され、のちにその補注という形式で敘事内容が添えられた。さらに、佛教系の『法苑珠林』卷第六十二忠孝篇、宋代の『太平御覽』、元代の『二十四孝』、明代の『日記故事大全』などが、郭巨の敘事を載せる各時代の代表的な文獻である。また、敦煌文書のなかに確認できる『孝子傳』および句道興『搜神記』も見逃すことはできない。

一方、やはり埋兒譚で、郭世道（「世通」とも）の話が正史系に見える。この孝子の名稱は、『初學記』にも見えるように「郭道」とされる場合もあるが、これは諱を避けて「世」の字抜いたものであると清の瞿中溶は説いている。⁽⁸⁾元來は郭世道のようにで、『宋書』⁽⁹⁾が初見である。その後、『南史』卷之七十三、『初學記』等にも引かれているが、いずれにおいても埋兒という危機的状況からの救済が施されているわけでもなく、また何らかの孝感奇應現象が起こつたわけでもない。

『初學記』においては、妻が「傷慈以終孝、吾无恨也。」⁽¹⁰⁾と言つて、とうとう埋めてしまつた（遂瘞之）と作す。さらにまた、瞿中溶もこれを論評して、

この話は（郭巨の故事の）漢代の後のことであり、（郭巨の故事と）同じく埋兒譚ではあるが、（ここでは）結局埋めてしまうことになり、しかも應報を得たという表現は無い。⁽¹¹⁾

と言うように、歴然と郭巨話との差異が確認できる。即ち、郭世道話においては

- (a) 孝行の對象が繼母である。
- (b) 兒孩を埋めてしまう。
- (c) 孝感が起こらない。

したがって、孫順埋兒譚との関連で、孝感をテーマとして論じようとする本稿においては、郭世道話は論考の対象外となり、郭巨話のみが検討対象となる。

ほかに、類似モチーフを持つ故事として、子を養うべく老父母を生き埋めにした波羅捺國の話が本生譚に見えるほか、高麗の『孝行錄』のなかの「鄧攸棄子」および「明達賣子」、『三綱行實』の「趙婦鬻子」も子供犠牲という点で関連してくる。しかし、いずれにも孝感譚の要素は見られず、検討対象からは除外する。

三 埋兒譚の話素の相互比較

結局、孝感というモチーフから孫順埋兒譚と比較されるべきものは郭巨埋兒譚のみということができよう。したがってここでは郭巨埋兒譚を比較軸とした孫順埋兒譚の位相を明らかにすべく、これらの説話を記す主要文獻に見える話素を対照させてみる必要がある。対象となる郭巨埋兒譚所收文獻およびその略稱は次のとおりである。

○『法苑珠林』（四部叢刊本）卷第六十二忠孝篇第四十九之餘 略稱（法苑）

○『太平御覽』（中文出版影印本）卷第四百十一人事部五十二

埋兒孝感説話の朝鮮的演變に關する論考（成澤）

の引く劉向孝子傳

略稱（御劉）

○千寶『搜神記』（元祿和刻本、汲古書院影印）卷十一

略稱（千寶）

○句道興『搜神記』（敦煌變文集、人民文學出版社）

略稱（道興）

○『補注蒙求』（天保和刻本）

略稱（蒙求）

○變文『孝子傳』（敦煌變文集P・九〇五、人民文學出版社）

略稱（變甲）

所收二篇のうち前者

○變文『孝子傳』（敦煌變文集P・九〇六、人民文學出版社）

略稱（變乙）

所收二篇のうち後者

○『日記故事大全』版『二十四孝』（寛文和刻本、汲古書院影印）

略稱（二十四）

○『日記故事大全』（寛文和刻本、汲古書院影印）卷三孝感類

略稱（日故）

○高麗『孝行錄』（高麗大學校中央圖書館藏、木板本）

略稱（高麗）

○朝鮮『三綱行實』孝子圖（世宗大王紀念事業會影印本）

略稱（三綱）

以上である。即ち、略稱（ ）はその所收の郭巨故事である。これらの話素を圖表によって示してみよう。

埋兒孝感譚の話素對照表

《凡例》

i 表の中の記載文は、原則的に原文からの抜粋であるが、省略されている部分は補充したし、また無くても原文の意を損なわない範圍で字句を削除したところもある。但し、

孫順話の部分はこのかぎりではない。
 ii “ ” は原文の引用する言葉や銘文を示す。
 iii アルファベット (A B C …) は話素の段次を示し、小數字 (1 2 3 …) はその段次の中での順序を示す。即ち、A₁、A₂、B₁、B₂、B₃ … の順となる。

文獻略稱	家産狀況	人的構成	埋兒動機	主人公の言動	妻の意識	結果・其他
法苑	甚富・分家財與弟。 ⁽¹⁹⁾	父歿・有弟・己獨取母供養。妻生男兒。	養兒則妨供養。	令妻抱兒已掘地欲埋兒於土中。		得一釜黃金金上有鐵券。
御劉	甚富。分家財與兩弟。	父歿。有兩弟。己獨母供養。妻產男。	養兒則妨供養。	令妻抱兒欲掘地埋兒於土中。		得金一釜上有鐵券。
千寶	錢二千萬二弟各取千萬。夫婦傭賃。	喪父。兄弟三人。巨獨與母居客舍。	與兒妨事親。老人得食喜分兒孫感饑	於野鑿地欲埋兒。		得石蓋下有黃金一釜中有丹書。
道與	家貧。	養母。有一子年始兩歲。	今飢貧。母年高、恐不安存。美味每減與子。令母飢羸乃由此小兒。	A ₁ 「兒可再有母難重見。今共卿殺子而存母命。」B ₁ 身掘地欲擬埋兒。 「子命盡不？」C ₁ ₂ 見金驚怪以呼其妻。	A ₂ 從夫言不敢有違。抱子往向後園樹下欲致子命。 B ₂ 不忍即害必稱「已死」C ₃ 抱子往看子未死妻乃喜悅。	C ₁ 得黃金一釜釜上有銘。「天賜孝子之金。官不得奪私不得取。」

埋兒孝感說話の朝鮮的演變に關する論考（成澤）

蒙求	家貧。	養老母。妻生一子三歲。	母常減食與兒。	「不能供給共汝埋子。子可再有母不可再得。」	不敢違。	忽見黃金一釜金上云「官不得奪人不得取。」
變甲	家貧。	養母。妻生一子年三歲。	時歲飢虛供養老母猶不充飽。被嬰孩分母飲食。	A-1「子可再有母不可得。共卿埋子以全母命不？」 A-3「令妻殺子。即掘地。B-2招妻。」	A-2「不敢違從夫之意。抱兒來入後園。B-3「抱兒則至。兒且猶活不忍下手。」	B-1「掘着一鐵器。乃見一釜釜中滿盈黃金。其上有一鐵券云「官不得奪私不得侵。」
變乙	傭作。	養母。有一兒。妻。	飢荒。兒常奪阿婆飯食遂不得飽。	「兒死再有母重難得。你可殺兒存母。」 令妻抱兒。穿地擬欲埋兒。		天懲其孝賜黃金一釜并有一文。官不得侵私不許取。」
二十四	家貧。	有子三歲。母。妻。	貧乏不能供母。子分母之食。	「盡埋此子。」掘坑。		得黃金一釜上云。「官不得取民不得奪。」
日故	家貧。	養母。妻生一子。	母嘗減食與子。貧乏不能供給。	A-1「共與埋子。兒可再有母不可再得。」 B-1「掘坑。」	A-2「泣而從之。」	忽見黃金一釜金上有云。「官不得奪人不得取。」
高麗	家貧。	養母。有子三歲。妻。	母常減食與子。貧乏不能供給。子奪母膳。	A-1「可供埋子。」 B-1「掘地。」	A-2「從之。」	見黃金一釜上有書云。「官不得奪人不得取。」

孫順	傭作。	母を供養。妻。	常に母の食分を奪う。	「子は得ることが出来るが、母は再びは求め難い。」 B地を掘って埋めようとする。 鐘を擔ぎ歸る。	A子を負って出かける。 D「異常なものを得たが、これは子の福である。埋めることはできない。」 E子を負って去る。	C忽然と奇なる石鐘を得た。 F王が招致。曰く「昔日、郭巨は天から金釜を下賜された。今日、孫順は地から石鐘を得た。」
----	-----	---------	------------	---	--	--

四 孝感得金について

前項に示した話素對照表によつて、物語の内容の變遷ばかりでなく郭巨說話群の系統問題⁽¹⁴⁾、埋兒という孝行爲を支える民衆の意識、孝感得金の實態、孫順埋兒譚の位相等様々な問題にアプローチが可能となろう。しかし小稿の目的上、ここでは孝感得金の實態、およびそれとの關連から探る孫順埋兒譚の位相の二點に絞つて詳論を試みようと思う(但し、孫順埋兒譚の位相の問題は、小稿の續編に回す)。

得金譚としては孟熙說話などもあるわけで、郭巨說話が唯一の得金事例ではない。『三綱行實』孝子圖「孟熙得金」によれば、孝子孟熙は父親の死亡を哀痛する餘り、眞心込めて

服喪していた。そうしたある時、地を掘っていると黄金數千兩を地中より得て大金持ちになつた。このように、財寶を得る事例において、人倫の最高たる至上の孝行爲には、やはり財寶としての最高たる黄金が授けられるべきものであり、また量的にも十分に幸福を享受しうるほどの分量(單位が兩であることに注意)が描寫される。これによつても郭巨說話における、孝感の結果としての「黄金一釜」の「一釜」は分量を描寫した句であると類推することができる。こうした問題が解明されてこそ孫順傳説の、小稿において重要となる特性が證明されるものと考えらる。

郭巨說話群における家産狀況や埋兒動機の話素から、敘事展開の上で二種類の系統を確認することができる。ひとつ

は、家財を弟達に分與し、子が老母供養の妨げになるといふ話例群（法苑）（御劉）（干寶）であり、もうひとつは家が貧しく傭作生活を送っているのに老母のための食べ物がない子にわたってしまふという話例群（上記以外のもの）である。

前者の話例群のなかでもうひとつはつきりと共通する點は記録された時期である。（御劉）は漢の劉向の撰である『孝子傳』からの引用であり、また（法苑）も（御劉）と殆どその辭句が同じで、やはり劉向『孝子傳』の系統であると見做されることから、どちらも漢代の記録に基づいた記事であることが分かる。これらに晉の（干寶）を含め、いずれもがかなり早期の六朝時代以前に記録された郭巨說話と言えよう。一方、後者の（蒙求）は唐の李翰の『蒙求』に宋の徐子光が加えた補注であり、（道興）は句道興の『搜神記』所收の記事であるが、この『搜神記』自體、書誌學的に多くの點で（特に成立年代の面で）つまびらかさを欠いているけれども、例えばその第14話「梁元皓・段子京」において「劉淵」を「劉泉」となし唐の高祖李淵の諱「淵」を避けていることなどからして、唐代あるいはそれ以後の記録であることが明らかである。さらに變文『孝子傳』も「開元」の年號が見えることからやはり唐代以後の編である。（二十四）及び（日故）そ

れに朝鮮側の（高麗）（三綱）は勿論それら以後の記録であつて、これら後者は相當後になつてから編纂された話例群であるということが分かる。

そこで、早期の記録と言つたところの前者の場合、孝感の結果として天が下賜した書狀（鐵券、丹書）の所在位置を確認してみると、（御劉）は「得金一釜上有鐵券」つまり金の「上」と解釋することができ、また釜（かま）の「上」とも解釋できよう。しかし、この（御劉）と全く同内容の（法苑）ではこの部分を「得金一釜金上有鐵券」と作しており、やはり書狀は金の上にあつたという解釋が妥當であつて、必ずしも實物としての釜（かま）を意識させるものではない。つまりこの「一釜」は分量を描寫しているには違いないが、實物の釜（かま）ではなく、もともと容量を表す中國古代の單位「釜」（先秦においては一釜＝六斗四升＝四分の一鍾）であつたと見るのがもっとも妥當であらう。ところが後代になると、例えば（變甲）の「見一釜、釜中滿盈黃金」であるとか、あるいは（道興）の「得黃金一釜、釜上有銘曰、天賜孝子之金」といった表現から分かるように、實物の釜の中に入っている黄金を得たという記事も存在する。朝鮮においても（高麗）は本文こそ「見黃金一釜、上有書云」と、明

確ではないものの、これに對する李齊賢の贊では“得金滿釜”と作し、釜（かま）に入れられた黄金を得たと解釋している。

ところが『三國遺事』の「孫順埋兒」では“昔郭巨瘞子、天賜金釜”とされており、またそれ以後の李朝の諸文獻、即ち小稿の續編において檢討を加えることになるであろう孫順記事においても“金釜”と處理している。ただ、『大東韻府群玉』と『東國新續三綱行實』にはこの部分の描寫がない。⁽¹⁵⁾

さらにまた『三國遺事』の代表的な現代朝鮮語譯例は、郭巨が“金の釜”を得たと作している。⁽¹⁶⁾あるいは『三國遺事』の金釜は、佛教でいう悟りの契機となった金釜譚の影響を受けているのかも知れない。⁽¹⁷⁾（高麗）の校註において權近は“故能上動天心、下得金釜”と表現しており、後代の解釋にかなりの影響を与えているようである。しかし“金釜”が金の釜ではないということは、以下の理由から明らかである。

第一に、權近は、“釜いっぱいの黄金を得た”という（高麗）の本文および李齊賢の贊をしかりと視認し、黄金の入っている釜であるということをよく知っていたうでその校註を附している點。第二に、ではなぜ權近が“金釜”と作したのか。彼の校註は四六文で作られており、須らく文章の體

裁上リズムを整えなければならないということを理解する必要がある。この點を韓國の研究者たちは見落としているようである。つまり“金一釜”の“一”の字を外したのである。

したがって、この部分は本文と贊によって表現されているように、あくまでも一釜分の黄金を得たと解釋するのが正當であつて、釜の登場は付隨的なものであつたのである。にもかかわらずこの話を得釜譚として處理したのが崔來沃氏と金鉉龍氏である。崔來沃氏は

地を掘つてみたところ、寶物（石鐘、鼓、食器、釜）が出てきた。⁽¹⁸⁾

と説き、しかも釜を得た例話として“郭巨得釜”を挙げながら、食藏山故事（忠清道に傳わる傳説）における食器とともに、釜が飲食上の餘裕を象徵しているという見解を示している。⁽¹⁹⁾ また金鉉龍氏は「（郭巨譚において）地を掘っていると地中から“黄金釜”が現われ」⁽²⁰⁾たと言っているように、やはり得釜と見做している。確かに、後述するようにある意味では郭巨話が飲食象徵的構造を有していると言えよう。しかし、“得釜”といった皮相的な認識など、彼らの説に見られるような安易な論法によつてではなく、より深く廣範な調査と考察によつて説明されるものと考ええる。

(イ) 漢代にあつては、「釜」は合・升・斗・斛・豆・區の上部單位、鍾の下部單位であつて容量を表す數量詞であつた。そして主に穀物の量を表示した。また一方、「黃金」には例えばやはり孝感譚の孟熙得金譚からも分かるように重量を表す「兩」や「斤」等の單位が用いられた。にもかかわらず郭巨話において容量に單位「釜」が用いられるに至つた経緯はどのように説明されるべきか。つまり黄金ではなく穀物であつたのではなからうか。

(ロ) では、郭巨はどのような地方の人であつたらうか。(御劉)は溫の人であるといひ、(干寶)は隆慮の人となしてゐるが、いずれも河内の地である。また(道興)(變甲)(變乙)等は河内の人となす。漢代には、洛陽から北東方面、即ち河内の方へ抜ける大道に溫が在り、またその北東即ち漳水の南側に隆慮が位置してゐた。ここは、戰國時代に灌漑事業の中心地の一つであつた鄴の地域である。『漢書』によれば史起を以て鄴の令となした。そして遂に漳水を引いてきて鄴を灌漑し、そうすることにより魏の河内を富地に仕上げた。民衆たちはこのことを歌にして「鄴に賢き令あり。それは史公様。漳水を分水して鄴地域を灌漑し、永く永く、鹹鹵(鹽分の多い土地)を渴斥してからは、

稻梁のよく育つことよ。」と言つた⁽²¹⁾。

とあり、戰國時代以後、この河内地方が穀物農耕地帯となつたことが分かる。漢代には、いつ凶作になつてもおかしくないほどの苛酷な環境にありながらも、こうした灌漑事業の恩恵を蒙つて穀物の收穫にあずかることができた。

(ハ) 敦煌文書に見える一連の郭巨譚(道興)(變甲)(變乙)は、その年が飢饉の歳であつたことを描寫してゐる。食用に回し得る穀物が底を突き飢饉に瀕すれば、當然のことながら翌年の播種のために嚴重に保管しておかなければならない種子までも食つてしまふわけで、播種時には非常な窮地に陥つてしまふ。

(ニ) 郭巨話の延長上にある敘事で、孝感の結果物品を得る話に劉殷得粟譚がある。母親を奉養する孝誠によつて地中から「粟十五鍾」を得たこの話も、釜の上部單位である鍾によつて容量を表している。この故事から推して、孫順が地中から石鐘(鍾)を得た話も、その原初的な形態においてやはり穀物と關連させて考えることが可能かも知れない。ただ、孫順説話における石鐘のモチーフについては別に論じたい。むしろここで注目すべき點は、漢土に孝誠によつて「粟」を得たという故事のある事實、そしてその粟とは單に「あわ」だ

けでなく、黍・米などの穀物の總稱であり、それも特に穀を剥ぎ取る前の粃を意味する點である。そして、その粃の色はまさしく黄金色なのである。

以上のことから次のようにまとめることができよう。即ち、孫順説話との関連で論じられている郭巨話において、郭巨が地中より得たものは釜（かま）ではなく、黄金によって象徴される穀物であり、特に穀を剥ぎ取る以前の粃であったのであろう。したがって、貧しく糧食も得難いような苦境にある家に、孝誠によって糧食が授けられたわけであるから、まさしく飢餓に対する孝感としての救済というべきものである。

〈注〉

- (1) 『三國遺事』卷五孝善第九「孫順埋兒」：孫順者牟梁里人。〈中略〉養老嫗。嫗名運烏。順有小兒。每奪嫗食。順難之。謂其妻曰。兒可得。母難再求。而奪其食。母飢何甚。且埋此兒。以圖母腹之盈。乃負兒歸醉山北郊。掘地忽得石鐘甚奇。夫婦驚怖。乍懸林木上。試擊之。春容可愛。妻曰。得異物。殆兒之福。不可埋也。夫亦以爲然。乃負兒與鐘而還家。懸鐘於梁扣之。聲聞于闕。興德王聞之。謂左右曰。西郊有異鐘聲。清遠不類。速檢之。王人來檢其家。具事奏王。王曰。昔

郭巨瘞子。天賜金釜。今孫順埋兒。地湧石鐘。前孝後孝。覆載同鑑。〈後略〉

- (2) 權準「孝行錄序」：府院君吉昌權公嘗命工人畫二十四孝圖。

〈中略〉院君以畫與贊。獻之大人菊齋國老。菊齋又手抄三十有八事。〈中略〉其辭語。未免於穴且俚。蓋欲田野之民皆得易讀而悉知也。

- (3) 李朝前期に『三綱行實』『續三綱行實』『東國新續三綱行實』が相次いで出されており、これらを三綱行實類と總稱することにする。

- (4) 權採「三綱行實圖序」：孝子則謹錄太宗文皇帝所賜孝順事實之詩。兼取臣高祖臣傳所撰孝行錄中名儒李齊賢之贊。

- (5) 『孝行錄』の異本は多い。徳田進『孝子説話集の研究』（井上書房、昭和三八年）によれば、可共埋之の部分を可共汝埋之となすものもあるという。

- (6) 『孝行錄』郭巨埋兒贊：郭巨家貧。養親竭力。母憐幼孫。每分其食。〈中略〉呼妻掘地。舉將埋之。〈後略〉

- (7) 北京大學中文系『中國小說史』（人民文學出版社、一九七八）pp三：寓言通過諷喻性的短小故事來說明一種道理、是最早的敘事文學形式之一。先秦、兩漢の歴史著作『中略』往往對重要的歴史事件和人物加以具體描寫、具有濃厚的文學色彩。特別是『史記』、再刻劃人物性格方面、取得了突出的成就。先秦兩漢の寓言故事和歴史散文、在寫人、敘事方面的藝術經驗、對後代小説的創作產生了積極的影響。

魏晉南北朝時期、由于神仙、鬼怪之說盛行、再加上佛教的廣泛傳播、產生了大量志怪小說。《中略》同時、由于崇尚清談的結果、還出現了『世說新語』這樣的志人小說。志怪、志人小說中一些較好的篇章、有物性性格、有簡單的情節、主題比較明確、結構漸趨完整、已擺脫了“叢殘小語”的局面、發展為粗陳梗概的小說作品。雖然它們“大抵一如今日之記新聞、在當時并非有意做小說”、但是、它們的出現畢竟標誌着中國小說已成為一種重要的文學體裁了。

- (8) 瞿中溶『二十四孝考』(臺灣廣文書局、一九八一年印行)
- (9) 『宋書』卷之九十一列傳孝義“郭世道”
- (10) 『初學記』卷第十七孝第四
- (11) 瞿中溶 *ibid.*: 雖事在漢後、而同一埋兒。竟埋之、而未言獲報。

- (12) 『雜寶藏經』卷之二“波羅捺國有一長者共天神感王行孝緣”
- (13) (高麗)の“田眞諒弟”から、弟の家産分取は不孝であることがわかる。

- (14) 不完全ながら、拙稿“埋兒說話の朝鮮的變容相について”『朝鮮學報』第百九輯、朝鮮學會、昭和五八年)において觸れたことがある。また小稿はそれを修正補充し、定論的にまとめた別個の論文である。

- (15) 小稿の續編に詳述する。

- (16) 李東歡譯『三國遺事』下(三天堂文庫、一九七五)、李丙憲譯『三國遺事』(太平洋書籍、一九七八)

埋兒孝感說話の朝鮮的演變に關する論考(成澤)

- (17) 『舊雜譬喻經』下
- (18) 崔來沃 『韓國口碑傳説の研究』(二潮閣、一九八四)
- (19) 崔來沃 *ibid.*
- (20) 金鉉龍『韓國古說話論』(セムン社、一九八四) pp・三〇六
- (21) 『漢書』卷第二十九“溝洫志”：以史起爲鄴令、遂引漳水溉鄴、以富魏之河內。民歌之曰、鄴有賢令兮爲史公、決漳水兮灌鄴旁、終古馮幽兮生稻粱。